

# 『はりぼて』

監督：五百旗頭幸男・砂沢智史

2020年／日本／100分



公式サイト

デジタル配信中  
© チューリップテレビ

## 社会を旅する シネマ

きつと もっと 近くなる  
きつと もっと 知りたくなる

有権者に占める自民党員の割合が10年連続日本1位、県別の市区議会議員に占める女性の割合が42位(2022年時点)。そんな富山県を舞台にした本作は、政界における同質性の「やばさ」を見せる。

2016年、チューリップテレビの調査によって重鎮の富山市議会議員の政務活動費に不正が発覚。これを発端に他の議員たちの不正も次々に明るみになり、たった半年で議員総数の3分の1を超える14人もの議員が辞職することに。その不正発覚前後を3年半にわたり同局の記者たちが追いつけた記録だ。

本作を観て感じる1つ目の「やばさ」は手口の稚拙さだ。開催していない政治集会を名目に請求したり、業者から白紙の領収書をもらって実態のない金額を記入したり、会場規模に見合わない大人数で計上したり……と、幼稚で杜撰な手口ばかりだ。

不正が発覚したときの対応も「やばさ」が溢れる。メディアが証拠になるものを探っているらしいと嗅ぎつければ、関係者に注意喚起しようと、守秘義務がある情報も横流ししてしまう。記者から証拠とともに問い詰められると、明らかにうろたえ、言葉に詰まり、嘘がバレバレだ。少し前まで横柄な態度をとっていた議員たちが一気にしおらしくなる。

そして、謝罪の嵐。清廉潔白かのように振る舞っている人物が、そのすぐ後にこうべを垂れて謝罪する。ときには床に額をつけて土下座まで。芋蔓式に次から次へと謝罪映像が流れる様子は、コミカル



## 同質性の“やばさ”が 滑稽かつ恐ろしくあぶり出される

アーヤ藍

な音楽も相まって、滑稽で思わず笑ってしまう。皮肉たっぷり編集されたコメディ作品なのだ。ただ、笑ってばかりもいられない。不正金額の合計は6千万円以上。私たちの税金だ。しかも、初めの頃こそ不正が発覚した議員は辞職したものの、次第に辞めずに続投する議員も増えていく。議員も私たち市民も、喉元過ぎれば……なのだろうか。

党派も関係なく3分の1以上の議員が同じ不正をしていたということは、「みんなでやれば怖くない」状態だったのだろう。ここで目を向けたのが議会における多様性のなさだ。不正が見つかったのは全員男性。おそらく全員50代以上でもある。以前「女性が多い会議は時間がかかる」発言があったが、逆に言えば、同質的な人しかいない集団では、あらゆるものが“なあなあ”にされるということなのだろう。

不正による辞任で欠員した議員の補欠選挙の投票率はたったの27%弱。ひどい不正の数々は市民にあきらめの気持ちをもたらしたようだ。この映画を観ても、「自分が政界に入って改革しよう！」と意気込む人はそういないだろう。腐り切ったコミュニティに数人ばかり新たな人が入り込んでも、変化は起こしがたい。議員数を割り当てるクオータ制の導入など半強制的な多様化が政治の世界にも急務なのではないだろうか。もっと「やばい」ことが起きる前に……。

アーヤあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。

